

千葉県・暁星国際流山小学校

【学年】4年生 【参加児童数】43名 【実施日】5月29日(木)

作文の書き出しは 自分に合った切り口で

初めての作文教室に久米先生も、児童のみなさんも少しかしこまってスタートしました。読書推せん文は「特別な相手に向けて本をおすすめする、手紙みたいな作文です」と久米先生。最初の一文が特に重要で、だからこそ難しいと言います。「書き出しは切り口が大切。切り口とはクッキー型のようなもので、同じ生地でも抜く型によってかわい、おもしろいなど印象が変わります」とも。



熱心にメモを取りながら、とても集中して久米先生の話聞きました

次に久米先生が出したのは「自分に合った切り口がわかるチャート」です。

書く意欲があつてテーマも決まった人は、どんな作文にもパズルのように、ぴったりの言葉(ことば)を当てはめられる「コトバズルタイプ」。久米先生は「ぜひ自分

の発想を大切にしていね」と話します。言葉が泉のようにあふれて、まとめきれぬ心配な人は「イズムイズミタイプ」です。そんな人へは「本の中のシーン、1ページだけを切り取ってみてはとアドバイス。」



「心が動いた言葉ってある？」など、声をかけていく久米先生

まるで卵の殻に閉じこもっているかのように、心の中の言葉を作文にするのが苦手な人は「タマゴカラタイプ」とのこと。「思い切つて失敗談を書いてみる」など、自分の殻を破る方法を提案しました。今は作文を書くことに苦手意識があるけど、作文が上手になる伸びしろがある人は「ノビシロマッシロマッシグラタイプ」で、書くのがたいへんなら「しやべりを録音して書き起こしてみたら楽しそう。自分に合った書き方を発見できたら、作文道へまっしぐら。作文が大好きになつちゃうかも」と背中を押しました。

わからなくなったら 起承転結を使って書いて

いよいよ実践編、読書推せん文に取りかかります。久米先生は文章の組み立て方の「起承転結」を紹介し、「わからなくなつたらこれを使って書いてみて」と話しました。

書いているみなさんの間を久米先生が回ります。だれにすめたらよいかわからないという児童に久米先生は「心に残つたページはどこかな」と問いかけます。また久米先生は、児童と「この本、知ってる」と盛り上がり、本が好きな児童と語り合つたりし、教室はなごやかな雰囲気(きふく)に包まれました。

参加した児童からは「緊張したけどうれしかった」「改めて作文が好きになつた」などの感想がありました。



みんなで肩を寄せ合い、終始なごやかな雰囲気(きふく)に包まれていました